

北の自然

北海道自然保護連合通信
No.71 2004.3.10

特集その2 北海道の大規模林道



台風10号で大規模林道はズタズタに

不可思議な『自然破壊』と 反対運動への『威圧』

—大規模林道建設予定地近くで 発覚した「穴埋め」の事実経過—

ナキウサギふあんくらぶ代表

市川利美

岩を少しだけ持ちあげてみると、その下は黒土で埋められていた

こんなことが今の世に？と、信じられない気持ちは今もあります。でも、現場に行くたびに、悲しい事実を見て、それが怒りに変わってくるのです。

* * * * *

昨年6月8日、大規模林道の様似・えりも区間の予定ルートに沿って、ナキウサギ調査をしました。そのとき、ある道有林内の2カ所でナキウサギの貯食を確認しました。ツルアジサイの葉とシダでした。そこは、環境アセスメントによってナキウサギはいないとされていた場所です。

平成10年のアセスでは、ナキウサギの大きな生息地や国の天然記念物である猛禽類などに影響を与えるため、「適切な保全対策を講じることは困難」であるとして、建設は休止になっていました。

ところがその後平成13年になって、林野庁はルートを変更。新しいルート沿いにはナキウサギは生息していないし、猛禽類への影響も軽微であるというアセス結果を根拠に密かに工事を再開していたのです。

しかし、そのアセスが間違っていたのですから、工事はいったんストップして、すべてについて調査をやり直すべきでした。そのことを林

野庁に伝えました。工事にプレッシャーをかけたつもりでした。

ところが、9月22日のことです。緑資源機構の北海道の責任者が、私の職場に突然来たのです（アポイントもなしに）。そのことを林野庁に伝えました。緑資源機構とは、林野庁の下で大規模林道の建設や環境影響調査を担当している独立行政法人です。

その責任者は、「NGOと行政の協働が大切である。ふあんくらぶがそのようなスタンスでいることはとても喜ばしい」とした上で、「ふあんくらぶが見つけた場所を具体的に教えてほしい」と言いました。

ふあんくらぶとしては10月に再度その場所を調査に行くので、それまで待つてほしかったのです。緑資源機構はお金も時間もあるのだから全体にいいいに調査すべきで、そうすれば生息地を確認できるはずだとも言いました。しかし、その責任者があまりにも懇願するので最後には、ポイントを示した地図を渡しました。

10月12日、私たちは予定通り、その場所で調査しました。十勝自然保護協会のメンバーが一緒でした。

林に入ると、なにかがおかしいのです。岩穴がいくつも土で埋まっていました。6月に貯食

を見つけたあたりです。その埋められた黒土がふわふわと新しく、その上には当然あるべき松の葉などの落ち葉がなかったのです。これはとても不自然なことでした。

そして、ある岩の前に頼りなげに生えているフッキソウの根元の土を指で軽く払った時のことです。土の中から茎と緑の葉が出てきたではありませんか。その瞬間、これは人為だ、と思いました。誰かがフッキソウごと土を岩穴に埋め込んだとしか考えられません。

ところで、「誰か」とはだれでしょう。普段はゲートがしまっている山奥で、一般の人はほとんど立ち入りません。道有林ですが、道の関係者がその林で森林施業をしたのは7月の初め。埋められた土は新しく、第一、森林施業をする人にはなんら動機がありません。大雨や台風や地震などの自然現象やシカによって土砂がこのような整然と岩の隙間に埋められるものでもありません。

私たちは、緑資源機構が関与した疑いが極めて高いと考えています。何より、動機。ルート沿いのナキウサギ生息地の存在は、工事の続行にとって大きな障害です。また、その林にナキウサギの貯食があったことを知っていたのは、私たち数人と緑資源機構だけでした。

穴埋め発覚の2日後、林野庁と緑資源機構に口頭で報告しました。その場にいた読売新聞記者の取材に対して、緑資源機構の北海道の責任者は、10月10日に専門家を交えて調査したが、ナキウサギが生息する痕跡はなかったと主張し、「もともとナキウサギのいないところで荒らす行為をするはずがない」と言ったそうです。

もともといない？たまたま、緑資源機構が調査したときは何も見つからなかったかもしれませんが、6月には貯食はあったのです。一度の調査でそこにナキウサギはいないと決め付けるのは科学的ではありません。現に私たちはその後も他団体やナキウサギの研究者と調査していますが、10月、11月と、調査するたびにその林で「貯食」を確認しています。彼らはいったい何を調査したのか疑いたくなります。

* * * * *

この問題はさらにここからです。もし本当に彼らが関与したなら、これは国民を欺く一大事です。だからこそ、私たちは林野庁と緑資源機構に真相解明を求めて抗議文を出したのです。林野庁は、逃げの姿勢で1カ月以上たって現地調査の日程を入れましたが、時すでに遅し。天候の問題もあり、調査は実現しませんでした。



岩穴ばかりか周辺のすきまも土で埋められていた



持ち込まれた黒土に差し込まれたように見えるフッキソウ

緑資源機構に至っては、「場所がわからないから調査できない」と言います。

そして驚くことに、緑資源機構の理事長名でふあんくらぶに、公式の場での謝罪と意見書の撤回を求めてきたのです。それも配達証明付きの文書で。NGOが突然、準国家機関からの謝罪要求などを受け取ったら、それは裁判を起こされたのと同じくらいショックを受ける、そうした効果を見越しての行為です。

その内容は、「内部監査を行なったところ、関係職員は全員、『穴を埋めていない』と答えた。だから、職員はやっていない。それなのに、ナキウサギふあんくらぶは、職員が関与したか、事実を確認もせずあたかも緑資源機構のしわざのごとくマスメディアに公表し、機構と職員の名誉、信用を害した」というものです。



しかし、私たちは彼らの仕業と断定したわけではなく、理由なく容疑が濃いつたわけでもありません。自らは現地調査もしないでいて、私たちに誤れというのは、反対運動への威圧としか考えられません。準国家機関である彼らは国民の批判に真摯に耳を傾けるべき義務があります。「ふあんくらぶへの謝罪要求は憲法で保障された表現の自由、活動の自由への侵害である」と、日本環境法律家連盟を始め、参議院の中村敦夫議員や道内の自然保護団体から抗議の声が出ています。緑資源機構こそ私たちへの謝罪要求を撤回すべきです。

大規模林道は、林道とは名ばかりで実は大型バスが通る観光道路といわれています。とはいえ、すでに完成した区間でも通る車はほとんどないのです。土建業界と、お役人の天下り先である緑資源機構の生き残りのための道路。そこに、国や自治体の巨額のお金が今後も延々と投資されるのです。そして、その自然破壊は耐え難いもの。杜撰な環境調査で事業を正当化し、山肌を大きく削り、森や川を壊し、動物たちの住処を奪っていくのです。ナキウサギやヒグマやワシ、タカ、フクロウたちの悲鳴が聞こえます。この事業はもう、止めましょう。

独立行政法人緑資源機構からナキウサギふあんくらぶ宛に配達証明郵便で届いた「回答及び嚴重抗議」文



平成15年11月7日

ナキウサギふあんくらぶ
代表 市川利美様

独立行政法人緑資源機構
理事長 伴次



『大規模林道平取・えりも線「様似・えりも区間」における人為的な生息地破壊に対する抗議及び北海道の大規模林道全路線の建設計画の白紙撤回を求める意見書』について（回答及び嚴重抗議）

平成15年10月17日付、私宛に貴団体から提出があった『大規模林道平取・えりも線「様似・えりも区間」における人為的な生息地破壊に対する抗議及び北海道の大規模林道全路線の建設計画の白紙撤回を求める意見書』（以下「意見書」という。）においては、貴団体がナキウサギ生息地としてある箇所（道有林155林班55小班）が「人為的に荒らされ破壊され」ており、「緑資源機構が関与している可能性が極めて高い」と主張している。

貴団体の主張が事実であれば、私としては重大なことと考え、北海道地方建設部に対する調査を実施した。この調査内容は、貴団体が指摘している

- ①複数の貯食に適した岩の下の穴に黒土を埋めたか？
- ②黒土にフッキソウを差し込んだか？
- ③トドマツを伐採したか？
- ④まとめて束ねてあったとされる除伐木を散乱させたか？
- ⑤すでにツル切り・除伐が実施されていたが、さらに何らかの人為的行為（枝条を引きずる等）を行ったか？

等についての事実確認をすべく、平成15年10月10日の現地調査に同行した第三者の専門家及び調査会社職員には事情聴取に協力をいただき、調査にあたった北海道地方建設部職員に対しては現地での行動状況について調査した。調査は、事業実行をチェックする部門の監査室長が実施したものであり、その調査概要は別紙のとおりである。

その結果、機構本部として、北海道地方建設部職員等が生息地を人為的に破壊した事実はないことを確認するに至った。

しかるに、貴団体の意見書では、推測に基づいて「緑資源機構が関与している可能性が極めて高いと考えている」としている。そのうえで「証拠隠滅を図るという前代未聞の極めて悪質な行為」、「多くの国民を欺くもの」、「民主主義への敵対行為である」等と断定し、機構の責任は極めて重いとしている。

また、このことについて貴団体がプレス発表し、一部報道されたと承知している。

従って、私としては、ナキウサギの生息の有無や対応については、引き続き広く意見を聞いていく考えであるが、それ以前のこととして貴団体が当機構の関与の事実の有無を確認することなく、あたかも当機構の仕業のごとくマスメディアに公表し、当機構及び関係職員等の責任を問うていること、また、当機構の社会的信頼性、関係職員の名誉及び個人的信用を著しく傷つけたことは誠に遺憾である。私としては、公式な場において誠意ある謝罪表明と提出された意見書の撤回を求めるものである。

分断化が進む北海道の森

—もう止めよう大規模林道

寺島 勇

ここに道路があつたことは信じられない光景。(平取・新冠区間)

大規模林道は、2003年10月緑資源公団（旧森林開発公団）から独立行政法人になった緑資源機構が、全国7カ所の森林地帯で1973年から建設を進めている幹線林道である。幅員7メートル（一部5メートル）、2車線完全舗装の国道並みの林道である。

現在、北海道では「滝雄・厚和線」（計画延長65.4キロメートル）、「置戸・阿寒線」（計画延長71.0キロメートル）、「平取・えりも線」（計画延長82.5キロメートル）の3路線が建設されている。

国は財政構造改革の一環として、1998年度から公共事業の再評価システムを導入した。農水省は林野庁に6名の学識経験者等からなる「大規模林道事業再評価委員会」（期中委員会）をつくり、原則として新規着工の翌年度から5年の倍数年目にあたる路線を対象に、順次再検討を行っている。また、新規着工区間については「大規模林道事業の整備のあり方検討委員会」（委員の大半は期中委員と兼務）が設けられ、検討を行っている。

この動きに反応してか、北海道における大規模林道工事は、急がされるようにハイピッチになった。これまで、日曜・祭日など休

日に工事が行われることはまづなかった。ところがこの数年、法面の緑化作業や擁壁の基礎工事など、下請け業者を中心に工事が頻繁に進められている。

しかし、その割には全体の進捗率は伸びていない。予算面もあるが、現場のいずれもがこれまでの平坦地や緩斜面での工事が終わり、いよいよ山岳地帯の厳しい場所に移っているからである。

急峻な地形に加え脆い地層が多く、工事現場では橋梁、トンネルなどが多用され、それに見合う形で工事量も大きくなっている。上下に切り取られる法面の面積は、通常の林道とは桁違いに大きく、崩落防止の巨大なコンクリート枠が随所に広がっている。

開削に伴う膨大な土石は、盛土に使用してもなお余り、現場近くの河川敷や溪畔林を潰して広大な土捨て場が何カ所もつくられている。狭い山間部の工事は山腹だけにとどまらず、大規模な溪流工事に及んでいる。

何よりも問題なのは、道路の伸び行く先々で水源地帯の優れた天然林が消え、野生動物の生息地が分断されていることである。

北 北海道のヒグマを含めた野生生物の現状は、これまでの開発行為によって次第に生息範囲を狭められ、多くの種で個体数の減少が指摘されている。

生息環境を奪われ大きな打撃を受けたシマフクロウは、昨年姿を消した日本産トキと同じ運命をたどりつつある。分布域がきわめて限定されているナキウサギも、保護対策が一向に進まない中で破壊行為だけがじわじわと進行しつつある。

大規模林道再評価委員会に提出される林野庁事務局の資料には、検討区域に「いまのところ貴重な動植物は報告されていない」との文言が目立つ。環境面の影響がこの文言で判断されているとは思いたくないが、提供されるごく限られた資料だけでは、現地の本当の自然の姿は見えてこない。

貴重種のありなしは大事だが、これが問題の本質ではない。貴重種のないごくありふれた自然であっても、環境上重要な自然はたくさんある。その地域における生態系をどうとらえどう保全するかにこそ意を払うべきで、そのための

検討資料が提供されるべきである。

大 規模林道事業にかかわる問題の一つに、地域住民を含めて関係者に様々な情報が十分提供されていないことがある。また、事業を進めるにあたって肝心な自然環境調査が基本的にきちんとは行われていない。一部で行われているものもあるが、内容が古かったり不十分である。また、それを基にした環境アセスメントも不備、欠陥が多い。

一例を挙げると、平成13年度版「様似・えりも区間環境アセスメント報告書」には、北海道新産植物や道内における希少な新産報告となる植物を八種あげている。本来ならすべてを評価対象とすべきであるのに、このうちの二種しか取り上げていない。

また、地元にあつて長年ナキウサギの調査を続けている研究者やグループが、予定ルートの上にナキウサギの糞や貯食を確認しているにもかかわらず、「ルート周辺にナキウサギは生息していない」と結論づけるなど、アセス自体の信頼性も問われている。



大規模林道の崩壊が被害を増大させた可能性は強い（平取・新冠区間）

そもそも大規模林道は、高度成長時代につくられた大規模林業圏開発計画に位置づけられた林道である。計画に盛り込まれた伐採、造林、保育、管理等の事業があつてこそその林道だった。その根拠となった開発計画は破綻し、現在では有名無実になっている。にもかかわらず、大規模林道だけが曖昧模糊とした目標のもとに独り歩いている。

自然や環境、森林や林業に対する国民の意識は、地球環境問題が現実となった現在、急速に変化している。地域のニーズも、推進期成会が出す形式的な要望書とは裏腹に、確実に変化している。

それなのに再評価作業は、5年毎、区間毎という細切れ作業で進行している。これでは全体の正しい評価はできないと思われる。再評価と言うからには、その時点で路線全体を対象にして、「時のアセス」の観点をしっかり踏まえて、新たな発想に立ってしなければならない。

事務当局の用意する資料、現地視察、公聴会からだけでは、実態がよく見えないのではない。再評価委員会は、現地をよく見て地元住民や関係市民の意見をよく聞き、科学的なデータを持たなければ、主体的な判断は難しい。事務当局は建設推進の意図を持っているから、それをチェックできるだけの中身を持たない限りずるずると引き回されて、小手先の修正しかできないことになる。

その事実を物語るように、これまでの再評価作業の中で中止になった区間は、「真室川・小国線」(山形)の「朝日・小国区間」ただ一カ所である。一時、休止の決定を見た「平取・えりも線」の「様似・えりも区間」と「飯豊・檜枝岐線」(山形・福島)の「山都区間」は、一部縮小して再開している。



工事はほとんど人目に触れることはない(置戸・阿寒線)



もろくも崩れ落ちた法面(平取・新冠区間)

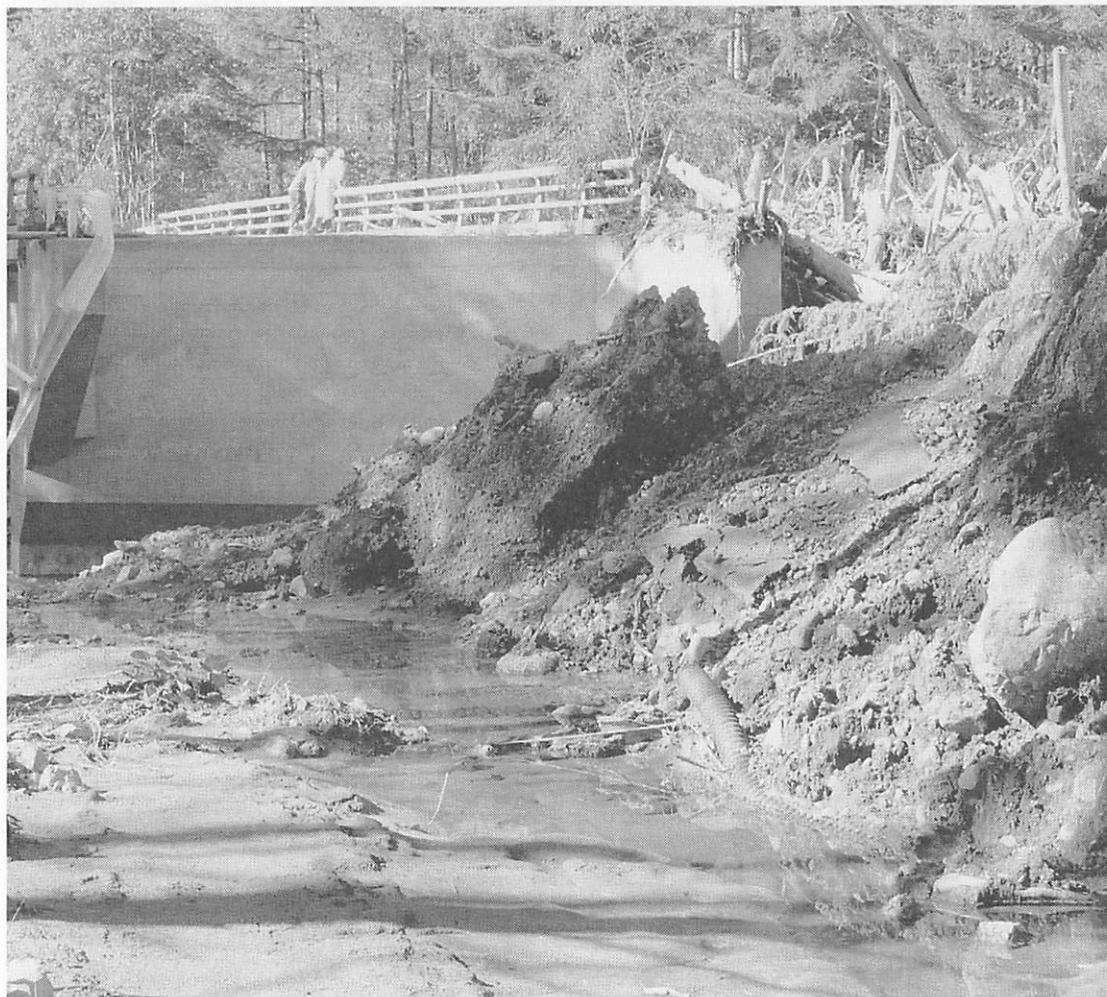
中止の数が少ないから十分な再評価をしていないと決めつけているのではないが、現場を見ているものとしては再検討の中身はその程度のものかと思ってしまう。一定の条件下で再評価する委員会に、すべての責任を押しつけることは適切ではないから、やはり再評価のあり方、しくみそのものを根本的なところから考えなければならない。

全国展開している大規模林道事業の再評価や検討をきめ細かく行うには、あきらかに人数が少なすぎる。メンバー選定に関しても、市民の意見が反映されるしくみがない。中央レベルの委員会だけでは地域の実情が見えないから、地域レベルの委員会の設置も必要など、検討課題はたくさんありそうである。

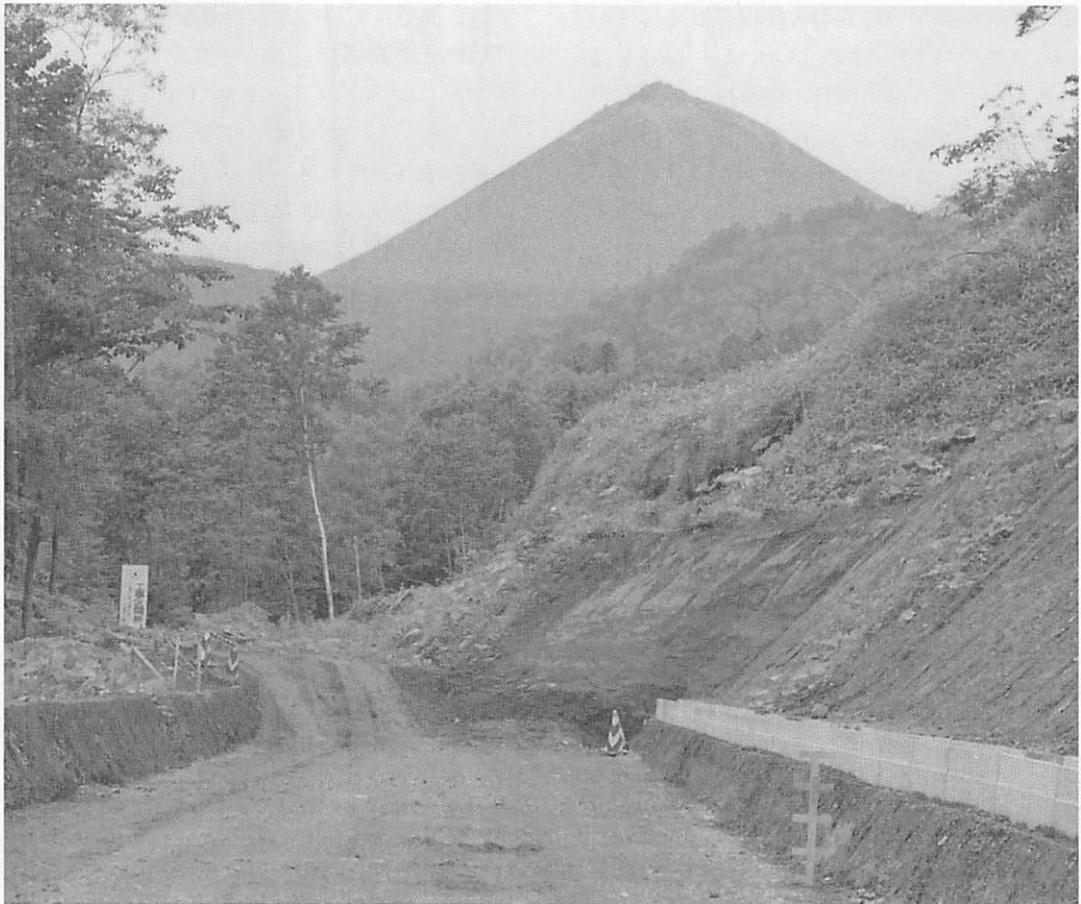
北 海道における大規模林道事業の完成延長と進捗率は、2002年度末現在、「滝雄・厚和線」52.8キロメートル（80.7%）「平取・えりも線」22.2キロメートル（26.9%）、「置戸・阿寒線」8.1キロメートル（11.4%）である。

着工年度から2002年度まで、完成した道路の年平均延長は、「滝雄・厚和線」約2.2キロメートル（着工年度1979年・24年間）、「平取・えりも線」約1.1キロメートル（着工年度1983年・20年間）、「置戸・阿寒線」約0.9キロメートル（着工年度1994年・9年間）である。

この進捗状況では完成までまだ何年かかるかわからない。最も工事の進んでいる「滝雄・厚和線」でもこれからは長大な橋梁とトンネル工事が待ち受けており、工事の進捗状況は厳しい。



山からきた流木で決壊した三里橋（平取・新冠区間）



国立公園のすぐ近くを走る大規模林道。後方は阿寒富士（置戸・阿寒線）

一部区間を除いてほとんどの区間が、人家のない行き止まりの山奥に向かって工事が進められており、古くから工事が始まった現場では、本格的な使用ができないまま傷む舗装面の修理や、雪解けとともに繰り返される法面崩落の修復が繰り返されている。

北海道の場合、仮に完成したとしても冬期間の半年間は眠ることになり、期待される効果は望めそうにもない。一部試行的に行われている費用対効果も森林の持つ公益的機能の過大な評価はするものの、道路建設に伴って失われている森林はネグレクトされているなど問題が多い。

昨年秋、日高地方を襲った台風10号は、厚別川流域一带に未曾有の大惨事をもたらした。この川の源流部には大規模林道「平取・新冠区間」が建設されていて、ほぼ全線にわたって壊滅的な被害を受けた。

これまで大規模林道は、災害時の代替道路と

して役に立つことは喧伝されても、災害を増大させる道路としての認識はなかった。今後は地域の振興に役に立つどころか、新たな不安材料になる可能性も十分ある。

政府は一昨年3月、1995年に決定した生物多様性国家戦略を全面的に見直して、新たな国家戦略を策定した。生物多様性を国の施策の重要な柱にすると決めた。その重要なステージの一つは、奥山と身近な自然を結ぶ中山間域である。北海道の大規模林道はまさにそこにつくられつつある。大規模林道問題解決の一つの隘路は、地元に住む人々を含めて、ほとんどの人がその現場を見ていないことだ。森を食いつぶし、水源を壊し、野生生物の住処を分断している現場をつぶさに見て、大規模林道の是非を判断することが急務である。地域の明日は、この大規模林道の行方と無関係でない。

—大規模林道・自然保護現地視察と交流会から—

ナキウサギと考える

地域振興と自然

大雪と石狩の自然を守る会

関 口 隆 嗣



大規模林道予定地付近でナキウサギの生息調査。
説明を受ける参加者

北海道自然保護連合主催による自然保護現地交流会が、同連合加盟の団体とその友好団体及び個人（5団体・2個人、29名）の参加を得、置戸町のひなびた(?)温泉宿において同連合加盟の大雪と石狩の自然を守る会（以下守る会）の主管で開かれた。

この度の交流会の主な目的は次の点にあったと思う。

一つには同連合が長く取り組んできた中心課題にあった土幌高原道路、日高横断道路の両問題が一応評価すべき形で決着を見たあと、次の中心課題として大規模林道を据えるということであった。

土幌、日高は何れも国立、国定の自然公園であり知名度も高く、特異な自然環境でもあり一般的にも関心が高くいわゆる生態系への懸念も

大であった。加えて開発目的の破綻、費用対効果も時流が示すように殆ど意味をなさない、などが明らかにされたのだった。

一方大規模林道建設の目的は、主に林業の活性化と地域振興が謳われているが、果たして林業の活性化に何ほどの効果をもたらすのか、費用対効果の面からも甚だ怪しい。生態系への影響はどうか、自然公園でもなんでもない普通の地域であるが動植物の多様性はむしろ高いのではないか。天然記念物であるシマフクロウやクマゲラなどの生息がわかり一時休止になったりもした。今また新たにエゾナキウサギの生息地が人為的に破壊されるという問題までも発生している。大規模林道建設は普通ではない普通の地域で進んでいるのだ。以前より俎上にあったのは周知の事実、取り組むべきは至極当然と思われる。

二つ目は連合は一定の評価が得られる運動を続けてきている。にもかかわらず運動（活動）に参加する団体や個人の輪が拡がらない。と言うよりむしろ近年は減じてきているのではないか。この現象をどのように捉えどのように打開していくのかと言うことであった。

これらは何れも同連合年初の代表者会議の場で合議されたものと承知している。肩肘張らず現地調査と交流会をやって見てはどうかと言うのが代表者の一致したところだったと思う。日程については守る会の予定（大規模林道の現地調査）に前日を加え宿泊・交流会を行うこととし、企画と運営は守る会が当たると言うものであった。

この交流会には第1回と名を打たれたが実は第2回目ではないかとの見解も述べられておりこの点については事務局にて確認されてはいかかと思われる。

開催2日間とも好天に恵まれた。参加者の精進

と連合の先行きを暗示してるのだろうか。

尚この温泉宿は交流会の貸切であったことを申し添えて起きます。

以下は自然保護交流会の実行内容である

主 催 北海道自然保護連合
運営主管 大雪と石狩の自然を守る会
開催日時 2003/10/18~19
開催場所 鹿の子温泉『鹿の子荘』 常呂郡置戸町常元
内 容 大規模林道問題への取り組みと交流会

第1日（10月18日）

I. 大規模林道予定地ナキウサギ生息調査

1、学習会

- ・ナキウサギの予備知識

正式名 キタナキウサギ 最北限生息地（北海道）

岩石が積み重なった隙間を住みかとする

- ・ナキウサギ生息場所の探し方

地質図及び地形図により岩塊岩石、崖錐の分布を調べる

2、調査実習・調査地

置戸・阿寒線の置戸陸別区間 春日・百林班の沢の2地区

貯食・食痕・フンなど無いか

古いか新しいか



トンネルや法面の掘削で出る岩レキや土砂の置場となっている広大な伐採あと地

今回は両地区ともらしき発見は無かった

指導 川辺 百樹さん(十勝自然保護協会理事)

II. 特別報告会

1、大規模林道の概要と建設地現況スライド

2、台風10号の大規模林道被害状況スライド

—平取・えりも線「平取・新冠区間」
6.9km—

3、ナキウサギ営巣地破壊！問題

III. 交流会 5団体 2個人 29名詳細は別紙)

第2日(10月19日)

I. 現地視察

大規模林道滝雄・厚和線「丸瀬布白滝区間」丸瀬布側及び白滝側

この区間の本年工期は済んでおり、その先端は急峻な斜面にぶち当たりこの先はトンネル工事に入るのではと思われる。ここより下部完成道路わきにトンネルからの岩礫砕の置き場と思われる広大な(7ha以上)面積の森が伐採されている。

初めて視察の人は規模の大きさに驚愕！その主な感想と意見をあげることでこの交流会のまとめに代えたいと思う。

※人の入らない目に付きにくい奥山で工事が行われている

※自然の改変破壊は計り知れない

※動物(鳥も含む)植物への影響は考慮されているか

※無駄というより人の行為がむなしく見える

※台風10号の被害発生^の教訓が生かされなければならない

※金の必要としているところはもっと他にあらはず この道路ではないのでは

※この工事はたくさんの市民が知らなければ知らせなければ などなど多数

参加者の皆様有難うございました。

北海道自然保護連合 03/10/18

2003自然保護現地交流会参加者名簿

講師 川辺 百樹

団体名 参加者名 性別

北海道自然保護協会 4名 (女1)

佐藤 謙 (男)

江部 靖雄 (〃)

小島 望 (〃)

松田 道子 (女)

大館 和弘 (男)

ナキウサギふあんくらぶ

4名 (女3)

市川 利美 (女)

市川 守弘 (男)

赤松 敏子 (女)

松田 道子 (女)

十勝自然保護協会

4名

佐藤与志松 (男)

植田 幹夫 (〃)

安藤 御史 (〃)

鏡 坦 (男)

松田まゆみ=日帰り

沙流川を守る会 1名

※この会は欠席でした

須藤 光郎 (男)

大雪と石狩の自然を守る会

10名 (女3)

寺島 一男 (男)

野田 勇 (〃)

渡辺 辰夫 (〃)

鎌田 明德 (〃)

舟橋 健 (〃)

関口 隆嗣 (〃)

真鍋 茂 (〃)

田中 弘子 (女)

中田美津子 (〃)

寺島 洋子 (〃)

読売新聞 1名

あさひかわ新聞 1名

嵐山ビジターセンター

1名

石川 悦子 (女)

大規模林道北海道

ネットワークを結成

2004年1月17日、標記の北海道大規模林道に反対するネットワークが結成されました。この結成に先立って、当連合の常務委員会が開催され、かねてからこの道路建設には反対の活動を進めてきましたのでネットワークの構成団体となり大規模林道建設の反対活動を進めることを決定しました。

ネットワーク構成団体（5団体）

北海道自然保護連合
社北海道自然保護協会
十勝自然保護協会
ナキウサギふあんくらぶ
大雪と石狩の自然を守る会

当連合からの役員

代表 寺島一男
代表幹事 反橋一夫
運営協議会役員 小山健二

代表者会議開催のお知らせ

北海道自然保護連合・代表者会議を開催致します。詳細は後日お知らせ致します。

日時 2004年5月8日(土) 午前10時

場所 未定

北の自然 No.71

2004年3月10日発行

発行 北海道自然保護連合
事務局 札幌市南区川沿10条3丁目12-2
小山 健二様方
TEL・FAX 011-572-2069
発行人 寺島 一男

賛助会費 年間3,000円
郵便振替 02710-5-4071

印刷 株式会社北海道機関紙印刷所



(全日本登山とスキー用品専門店協会会員)
登山とアウトドア専門店

秀岳荘

(本店) 〒001-0012 札幌市北区北12条西3丁目
TEL011(726)1235
営業時間 AM10:00~PM7:00 ●月曜定休

(白石店) 〒003-0026 札幌市白石区本通1丁目南2
TEL011(860)1111
営業時間 AM10:30~PM7:30 ●水曜定休

(旭川店) 〒070-8045 旭川市忠和5条4丁目
TEL0166(61)1930
営業時間 AM10:00~PM7:00 ●月曜定休

<http://www.shugakuso.co.jp>